

論 文

憶える文学史から考える文学史へ

Another Look at Teaching Japanese Literary History: A Critical Thinking Approach

徳植 俊之

Toshiyuki TOKIUE

キーワード：日本文学史の授業、古典教育、古今和歌集、伊勢物語

一 はじめに

まずはじめに、本稿の論旨は、知識の暗記を否定するものではないことを断っておきたい。知識は思考の材料である。知識がないところで思考することはできない。いかに多くの知識を手に入れるかが、より深い考察を可能にする重要な鍵を握っていると考える。

しかし、昨今は考える力を重視するあまり、知識の暗記を否定するような発言が目につく。大学で教鞭もとっているある米国人タレントが、テレビの教育番組でアクティブラーニングをめぐる次のような発言をしているのを聞いたことがある。

「スマートフォンなどを使えば簡単に必要な知識を得られる時代に、学校で一生懸命知識を暗記するなどということはおかしいと、以前から思っていた。」

結論から言うと、これはすでにある程度の知識を持っている人にあてはまることで、知識が全くない、あるいはほとんどない者は、そもそも問題意識を持つこ

とさえもなく、何かの知識を調べなければならぬような場面に出会うこともほとんどないであろう。また、仮に問題意識を持ったとしても、どういう知識をどのように調べたら解決できるのかもわからないであろう。ある分野の知識が必要になるといえるのは、ベースとなる知識がある程度持っていないければならない。

また、インターネット上の知識はまさに玉石混淆で、中には誤った知識も氾濫している。最近社会問題ともなったことだが、健康や医学に関する誤った情報がネット上に氾濫し、それを信じた人たちに健康被害が生じているということもあった。私たちは、ネット上にあふれている情報の中から正しい知識を取捨選択しなくてはならない。そのためには、正しい情報を取捨選択するための基礎知識が必須である。

本来、知識力と思考力とは、両立しなくてはならないもので、いかにそれをバランスよく身に付けていくかが重要なのであった。なんのために知識を身に付けるのか、と言えば、それは考える材料を得るためであった。それを従来は、やみくもにただ暗記せよ、と指導してきたから、こんなことを憶えてなんの役に立つ

のか、必要になったら調べたらいいではないか、という議論になってしまったのである。

本稿は、知識を身に付けることの楽しさや意義を感じながら学習を進めていくためにはどうしたらいいかという観点で、文学史の知識の学習法を考えてみたい。高等学校の国語の授業では、各教材作品の文学史的な知識について触れることが多い。芥川龍之介はいつ頃に活躍した人であるのか、源氏物語の作者は誰か、といった知識は、日本人の教養として持つべきものであろうし、国際化の時代にあつて、自国の芸術・文学について全く知らないというのでは困るということもある。文学史は、教養に深く関わる、暗記すべき知識である。

ただ、例えば歴史教育が単なる暗記から思考へと舵を切っているように、文学史もただ必要事項を憶えるだけでは、それを必要と感じない、あるいは問題意識のない学習者にとってはテストのための勉強にしかならないだろう。そうならなために、文学史もまた疑問を持ち、考える教材として扱うように工夫していく必要がある。

本稿では、特に古典教材の中から『古今和歌集』と『伊勢物語』を中心に、考える文学史の授業の展開を考えてみたいと思う。

二 『古今和歌集』をめぐって

まず、『国語総合』の各教科書における『古今和歌集』の解説文からとりあげてみたい。各教科書の記述はおおむね同じなので、第一学習社・東京書籍・三省堂の解説文を引用する。

【第一学習社『高等学校国語総合』】

最初の勅撰和歌集。二十巻。醍醐天皇の勅命により、九〇五年（延喜五）ごろに成立。撰者は、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人。歌数約千百首。春・夏・秋・冬・恋・雑などの部立のもとに整然と配列され、その後の勅撰和歌集の範となった。歌風は繊細・優雅で理知的傾向が強く、掛詞、縁語、見立て、擬人法などの技巧が駆使されている。（二九五頁）

【東京書籍『精選国語総合』】

最初の勅撰和歌集。二十巻。約千百首。延喜五年（九〇五）頃に成立。醍醐天皇の命によって、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が編集した。仮名序と真

名序を備え、以後の勅撰和歌集に大きな影響を与えた。（二八三頁）

【三省堂『精選国語総合』】

歌集。醍醐天皇の勅命により、九〇五（延喜五）年、紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑によって撰進された最初の勅撰和歌集。歌数は約千百余首。全二十巻。わが国初の文学論といわれる仮名序（紀貫之）と、漢文で書かれた真名序（紀淑望）の二つの序文がついている。（二七〇頁）

これらの解説文で、まず問題となるのは、成立年時を「延喜五年頃」とする教科書がある一方で、三省堂のように延喜五年の成立と断定している本があるのはなぜか、ということである。実際の授業では、複数の解説文を比較することはしないが、しかしこのような微妙な記述の違いはどこから来るのか、ということも、少なくとも教える側は確認しておく必要があるだろう。

また、醍醐天皇の勅命で四人の撰者が編集したという点も、ただ単にそのように暗記させるのではなく、それが何を根拠にした記述であるのかを押さえることが必要である。その根拠となるのが「仮名序」である。

かつての教科書には、一部とは言え「仮名序」を載せていたが、最近参考資料としてさえも載せていない。しかし、あらためて指摘するまでもないが、『古今和歌集』の成立に関して「仮名序」からわかることは多い。次に、その成立に関して述べた「仮名序」の該当部分を引用する。

かかるに、今、皇の天の下知ろし召すこと四つの時九回になむ成りぬる、あまねき御うつくしみのなみやしまの外まで流れ、広き御めぐみのかけ、筑波山のおもともよりもしげくおはしまして、よろづの政を、きこしめすいとま、もろもろのことを捨てたまはぬ余りに、いにしへのことをも忘れじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、今もみそなはし、後の世にもつたはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所の預紀貫之、前の甲斐の少目官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、万葉集に入らぬ古き歌、みづからのをもたてまつらしめたまひてなむ、それが中に梅をかざすより始めて、郭公を聞き、もみちを折り、雪を見るにいたるまで、又鶴亀につけて君を思ひ人をも祝ひ、秋萩、夏草を見て、妻を恋ひ、逢坂山にいたりて、たむけを折り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさぐさの歌をなむ撰ばせたまひ

ける、すべて、千歌、二十卷、名づけて古今和歌集といふ。(傍線筆者)

「仮名序」の記述は、醍醐天皇の治世になって九年の歳月が流れた「延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所の預紀貫之、前の甲斐の少目官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、万葉集に入らぬ古き歌、みづからのをもたてまつらしたまひて」作られたとある。またその内容に関しても四季、賀、恋、雑歌などを並び、全体の規模は千首、二十巻であること、そしてこの歌集を『古今和歌集』と名付けたことを述べている。撰者貫之が書いた「仮名序」の記述によって『古今和歌集』の成立事情が判明するのである。

その上で、成立年時の書き方に微妙な差異のある理由に触れておくことも、文学史の学びをより深めることになるだろう。そもそも「仮名序」の記述は、延喜五年四月十八日に勅命が下ったのか、それとも完成したのか、はっきりしない。この日付は「真名序」の最後にも出てくるが、「真名序」でも、

于時延喜五年歲次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序

とあるだけで、どの時点を示したのか判然としない。

しかも、『古今和歌集』の和歌の中には、延喜十三年の「亭子院歌合」の和歌が入集するなど、明らかに延喜五年以後の歌が見られることから、現在見るような形に完成したのは延喜五年より後とせざるを得ない。これを、延喜五年に勅命が下って、延喜十三年以後に完成したと見るのか、それとも延喜五年にいったん完成を見て奏覧されたが、それ以後も何首かの歌が増補されるなど手直しが加えられたと見るのか、成立年時に関しては説が分かれている。それゆえに、成立は「延喜五年頃」とするのが正確であり、そのように記述する教科書があるのである(注1)。

このように、一見動かない常識、定説であると思われることも、その根拠をよくよく確認すると、実に曖昧な状況であるということのままある。常識を疑うことがいかに重要であるのか、盲目的に暗記するのではなくて、その根拠を考えることで、新たな発見や新説が生まれる機会もあることを知るとは、学ぶことのおもしろさに気づく契機になるであろう。

なお、「仮名序」には、六歌仙とその評も書かれている。時間に余裕があるならば、そのくんだりも読ませたい。特に、在原業平は『伊勢物語』の主人公「男」の

モデルとして教材に登場し、小野小町や僧正遍照・僧喜撰・文屋康秀は『百人一首』の歌人であり、その和歌は教科書の教材にも採られている。六歌仙は古典和歌の学習者にとってはなじみのある歌人たちなので、「仮名序」に登場し、貫之がそれぞれにコメントを残していることは押さえておきたい。

整理すると、次のような授業展開が考えられるだろう。

- ①『古今和歌集』『仮名序』を紀貫之が書いたことを確認し、『古今和歌集』の成立に関わる記述の部分を資料として配付し、その内容を押さえる。
- ②そこに書かれたことから、四人の撰者、成立の経緯、内容などを押さえる。
- ③「延喜五年」という年時が記されていることに注目させると同時に、それ以後に詠まれたことが確認できる和歌も入集していることを確認し、この年時がどの時点を意味しているのか、また成立年時をどのように考えたらいのか、自由に意見を交換させる。グループワークにするといいであろう。
- ④『古今和歌集』の成立年時については、さまざまな考え方があることを示し、文学史の常識と言われることにも根拠があり、またすべてが間違いのない定説であるとは言えないことに気づかせる。

三 『伊勢物語』をめぐって

『伊勢物語』は高等学校の古典教材としては定番中の定番と言ってよく、『国語総合』の教科書ではすべての出版社のものに採択されている。

さて、各教科書における『伊勢物語』についての解説文を確認しておこう。いずれの出版社のものもおおむね同じで、大きな異同はないので、ここでは三社の例をあげる。

【第一学習社『高等学校国語総合』】

歌物語。作者は未詳。十世紀中ごろまでに段階的に増補されて成立。約百二十五段から成る。在原業平を思わせる男を主人公とし、その一代記ふうの体裁をとっている。(二五一頁)

【東京書籍『精選国語総合』】

歌物語。約百二十五の章段から成り、各章段は和歌を中心に構成されている。作者未詳。十世紀初頭頃までには原形ができ、後に増補されて、今の形になったのは十世紀後半頃かといわれる。『古今和歌集』の代表的歌人である在原業平を思わ

せる人物を主人公として、その元服から死までの一代記のような形をとっている。
(二七二頁)

【大修館書店『精選国語総合』】
歌物語。作者は未詳。原形は一〇世紀初めまでに成立。現在の形になったのは、一〇世紀の中頃。在原業平の歌を中心に、約一二五段から成る。業平と思われる男を主人公として、一代記風に構成されている。(二二二頁)

いずれの記述も、ジャンル(歌物語)・作者(未詳)・成立(原型は十世紀初頭、現在の形は十世紀半ばあるいは後半)・内容(約百二十五段・業平を思わせる男の一代記ふうの体裁をとる)について触れ、その記述に大きな異同はない。

ところで、ここで注目したいのは、作品の内容について「在原業平を思わせる男を主人公とし、その一代記ふうの体裁をとっている」とする点である。この記述も各社ほぼ一致している。

【明治書院『高等学校国語総合』】
全体として在原業平を想起させる「男」の一代記のような体裁を取っている。

【数研出版『高等学校国語総合』】
在原業平を思わせる男の一代記風に構成されている。

【桐原書店『国語総合』】
全体は、業平を思わせる「男」の一代記風に構成されている。

【三省堂『精選国語総合』】
在原業平と考えられる「男」の一代記のように構成されており、(後略)

【教育出版『国語総合』】
在原業平の歌を中心に成立し、(中略)歌を中心にした短い物語を集めて、「昔男」の元服から終焉までの一代記的な構成になっている。

【筑摩書房『国語総合』】
在原業平とおぼしき「昔男」の一代記という体裁をとっているが、各章段はそれぞれ独立しており、すべての話が和歌を中心に構成されている。

ところが、『国語総合』の各教科書が載せる『伊勢物語』の章段を読むと、「在原業平を思わせる男の一代記ふうの作品」とする記述と矛盾する点があることに

気づかされるのである。次表は、教材としてとられている章段の一覧表である。

【教科書掲載章段一覧】

出版社	教科書名	6	9	23	24	60	83	84
教育出版	国語総合	○	○			△		○
	新編国語総合	○						○
桐原書店	国語総合	○	○				○	
	探求国語総合	○	○				○	
三省堂	国語総合	○	○					○
	明解国語総合	○	○					
数研出版	精選国語総合	○	○					
	国語総合	○	○					
第一学習社	高等学校国語総合	○	○					
	高等学校国語総合	○	○					
大修館書店	標準国語総合	○	○					
	新訂国語総合	○	○					
東京書籍	新編国語総合	○	○					
	精選国語総合	○	○					
筑摩書房	国語総合	○	○					
	精選国語総合	○	○					
明治書院	国語総合	○	○					
	精選国語総合	○	○					

*教育出版『国語総合』で第六十段に「△」が付いているのは、「六十段を調べて、現代の物語にしてみよう」という課題のみあげられて、章段本文は掲載されていないことを示す。

まずは、この一覧表にあげられている各章段(算用数字)の冒頭部分を示して

みよう。本文は岩波書店『新日本古典文学大系』による。

第六段「芥川」

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。

第九段「東下り」

むかし、男ありけり。身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れるひともなくて、まどひいきけり。

第二十三段「筒井筒」

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりければ、おとも女も、恥ぢかはしてありけれど、おとこはこの女をこそ得めと思ふ、女はこのおとこをと思ひつつ、親のあはずれども、聞かでなんありける。

第二十四段「あづさ弓」

むかし、男、片田舎に住みけり。おとこ、官仕へしにとて、別れおしみてゆきけるままた、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、(後略)

第六十段「花橋」

むかし、男ありけり。官仕へ忙しく、心もまめならざりけるほどの家刀自、「まめに思はむ」といふ人につきて、人の国へ往にけり。

第八十三段「小野の雪」

むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王、例の狩りしにおはします供に、馬頭なる翁仕うまつれり。

第八十四段「さらぬ別れ」

むかし、男ありけり。身はいやしなながら、母なん宮なりける。その母、長岡とい

ふ所に住み給ひけり。子は京に官仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうです。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

これらの冒頭部を読むと、まず「男」の設定に一貫性のないことに気づかされる。第六段、第九段、第六十段は貴族社会に属する人物と見なすことができ、第八十三段も惟喬親王に仕える「馬頭なる翁」であるから、やはり貴族階層に属する設定であるが、第八十四段は「身はいやしなながら」とあるので下級官人という設定で、ただし母親は「宮」で、しかも一人っ子であったとする。

注目されるのは、第二十三段、二十四段である。第二十三段では「田舎わたらひしける人の子ども」とあり、いわゆる都生まれの貴族階層という設定にはなっていない。さらに、続く第二十四段も「片田舎」に住み、京の都へ官仕えをするために出かけるという設定であるから、京外に住んでいる下級階層ということになる。第二十四段は、第二十三段の後日譚とも読むことができ、設定はほぼ同じと見てよい。

このように、教科書に採られた章段を見る限りでも、主人公「男」の設定はまったくバラバラで一貫性がない。「男」のモデルとされる在原業平は、平城天皇の皇子阿保親王を父に持ち、母は桓武天皇の皇女伊都内親王と、天皇家の血を濃く引く名門の生まれである。兄に在原行平がおり、天長三年(八二六)に兄行平らとともに在原姓を賜り、臣籍降下している。最終官職こそ従四位上右衛門権中将兼美濃権守と、公卿に列することもなく、高位に昇ったわけでもなかったが、業平が王家の末裔であることは事実である。したがって、第二十三段、二十四段のように「田舎わたらひしける人の子ども」という設定はあり得ないことであり、また第八十四段の「身はいやしなながら」というのも事実には反する。

そもそも、『伊勢物語』の主人公は「男」と三人称で表記されている。作品中、わずかに第六十三段に「在五中将」という業平を指す固有名詞が用いられ、第六十五段に「在原なりける男」という呼称が出てくるほかは、すべて主人公は「男」で統一されている。それを「男」すなわち在原業平のこととするのは、作品中の和歌の多くが『古今和歌集』で作者業平として入集し、業平の家集『業平集』に収められているからである。つまり、業平の和歌と認定できる歌が、『伊勢物語』では「男」の歌として登場することから、作中の「男」は業平と想定できるのである。

さらに、定家本によれば、初段は元服した「男」の話で始まり、最終の百二十五段は「男」の辞世の歌で終わる構成になっているので、全体として大きく、一人の「男」の人生のスタートから死までを描くという一代記の体裁になっていると見られるのである。もちろん、百二十五の章段は必ずしも時間の系列にそって配置されているわけではないが、大きくとらえたときに、一代記という解釈は成り立つであろう。

実際、平安時代からすでに『伊勢物語』は『在五が物語』（源氏物語・総角巻）、『在五中将の日記』（狭衣物語）などの呼称でも呼ばれており、また『源氏物語』「絵合巻」では、「男」が在原業平であるという前提で、「業平が名をやくたすべき」「在五中将の名をばえくたさじ」（岩波書店・新日本古典文学大系『源氏物語二』一七七頁）といった会話が交わされている。「男」が在原業平であるということは、早くから『伊勢物語』の読者にあつては当然の了解事項であった。

もちろん、実在の人物をモデルにしているからといってすべてノンフィクションであるとは限らないであろう、当然、作者の想像力により、多くのフィクションが交えられることは十分考えられる。

ただ、そうだとしても、一人の作者によって業平をモデルに書かれたのであれば、「男」像には一定の統一性があるはずである。『源氏物語』の主人公光源氏は、巻によって出自や立場が大きく変わるようなことはない。『平中物語』の平貞文も同様である。やはりこの一貫性のなさは、『伊勢物語』の特徴と言つてよいのである。

ここであらためてさきほどあげた「教科書掲載章段一覧」を見ていただきたい。教育出版を除くすべての『国語総合』の教科書に、実際の業平像からは最も遠いと思われる「田舎わたらひしける人の子ども」と設定された第二十三段が掲載されていることに注目したい。『伊勢物語』は業平を思わせる「男」の一代記ふうの作品であるとする一方で、教材には第二十三段を掲載している。これを『伊勢物語』とはどのような作品なのかということ考察する材料として利用することはできないだろうか。他の章段も読んだ上で、章段ごとに「男」の設定に差異があること、そしてそれがモデルとなった業平像と一致しないことに気づかせ、そうした描かれ方になっている背景を考えさせるのである。

常識的に考えれば、一人の作者が、ある時期に一気に書き上げた場合は、作品内部に一定程度の一貫性が生じるはずである。それがないとすれば、一人の作者

によって、かなり間隔を空けて書かれた（書き足された）か、複数の作者によって原型となる作品に後から次々と書き足されていったかのどちらかであろう。『伊勢物語』の場合は、各教科書の解説文でも触れているとおり、『古今和歌集』以前に原型が作られ、それに増補されてできあがったのが現在の『伊勢物語』であると考えられている（注②）。この設定の矛盾は、まさに作品の成立事情と深く関わっていたのである。

このように考えてくると、『伊勢物語』の主人公「男」は在原業平で、この作品は業平の一代記ふう構成されていると単純に決めつけ、それをただ知識として提示して覚えさせるといふ授業展開はあまりにももったいないと思われる。教材そのものに、成立事情を解くヒントが隠されているのだから、それを利用して、なぜこのような齟齬が生じたのか、その理由を考えさせることで、文学史というのは決まり切ったことを暗記するのではなくて、作品が内包するさまざまな問題や矛盾に合理的な説明を試みることで作られていくのだということに気づかせることができるのではないだろうか。

整理すると、次のような授業展開が考えられるだろう。

①『伊勢物語』各章段を読解した上で、それぞれの設定、特に「男」像（出自・身分等）がどのように設定されているかを確認する。第二十三段には特に注目させたい。

②『伊勢物語』の作品解説文に「在原業平を思わせる男を主人公とし、その一代記ふうの体裁をとっている」とある点を押さえ、さらに、在原業平の出自等について確認する。

③『伊勢物語』に描かれた「男」像と実際の業平像とを比較させる。特に王家の末裔である業平がモデルであるとしたら、物語中の「男」のような出自や行動はありえるのか考えさせる。ここでは、両者に距離のあることを確認し、さらに章段によって設定にばらつきのあることも押さえさせたい。

④なぜこのような描き方、物語の設定が起きたのかを考えさせる。グループワークを取り入れるのが有効であろう。一人の作者が書いた場合、複数の作者が書いた場合など、さまざまな可能性を自由に議論させたい。

⑤④について、一つの結論に絞る必要はないが、現在の一般的な考え方としては、複数の作者によって書き足されていった可能性が高いと考えられていることを最後に押さえておく。

『伊勢物語』の場合、書名の由来もわかっていない。『伊勢物語』という書名は、すでに『源氏物語』『絵合巻』にも登場しているので、早くからこの呼称が用いられていたことは確認できるが、ではなぜこの作品を『伊勢物語』と呼称したのか不明なのである。この点についてはこれ以上深く触れることはしないが、『伊勢物語』のようなよく知られた作品でも、まだまだわからないことが多く残されていることにも触れておきたい。知識を得ることで、逆にわからないことの存在が見えてくるのである。

四 おわりに

文学史の知識、常識というのは、長い間の研究の成果の上に成り立っている。それぞれの作品の制作現場を目にすることができない現代人が、いつ・誰の手によって・どのような事情でその作品が作られたのか、ということについて語ることはできるのは、根拠があつてのことである。従来の授業方法では、文学史の知識というのは、ポイントを押さえて暗記させるところに主眼があつた。しかし、学習者の主体的な学びが求められる今は、知識一つ一つの根拠を考え、どういう理由でそのように判断できるのかをしっかりと理解することが重要であると思う。また、単なる暗記では、興味を持たない学習者や、それを必要と感じない学習者にとっては、学ぶ意義を見いだすことができないであろう。「憶える文学史から考える文学史へ」と発想を転換することで、より生き生きと、そして学ぶ楽しさや意義を感じるような授業を作ることが可能になるのではないかと。そしてまた、そのような授業方法は、アクティブラーニングでは知識は身につかないのではないかと、という危惧に答えることにもなる。要は、学習者がいかに学ぶ意義を感じるかであり、思考を重ねながら知識を身に付けるような環境を作っていくことが生きた学習を生みだしていくのである。

【注】

1 『古今和歌集』の成立等については、すでに多くの研究書や注釈書類に述べられているが、村瀬敏夫「古今和歌集の成立年代と時代背景」(一冊の講座古今和歌集)有精堂出版・一九八七年三月)は問題点を的確に整理している。そのほかに、以下の注釈書の解題が、これまでの研究史や諸説を含めてわかりやすく解説している。

『古今和歌集』小学館・新編日本古典文学全集
 『古今和歌集』岩波書店・新日本古典文学大系
 『古今和歌集』小町谷照彦訳注・旺文社文庫(ちくま学芸文庫)
 『古今和歌集』高田祐彦訳注・角川ソフィア文庫

2 『伊勢物語』の成立についての諸説は、すでに多くの研究書や注釈書類に述べられているが、『日本古典文学大事典』(岩波書店)の片桐洋一の解説は、自身の説も含めて詳しい。また、『國文学 伊勢物語と業平の世界』(學燈社・昭和五十四年一月号、第24巻1号)は『伊勢物語』の特集号であり、福井貞助「伊勢物語成立研究の争点」は、それまでの成立論の整理とその問題点を指摘し、

山田清市「伊勢物語の成長と作者」、室伏信助「物語を喚びおこすうた」は当時大論争となっていた片桐洋一の成立論に対する反論を試みており、読むべき論考が多く掲載されている。このほか、以下の注釈書の解題も参考になろう。

『竹取物語・伊勢物語』岩波書店・新日本古典文学大系

『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』小学館・新編日本古典文学全集

『伊勢物語全釈』森本茂著・大学堂書店

『伊勢物語』大津有一校注・岩波文庫

* 片桐洋一の成立に関する研究、及びそれをさらに発展させた大野晋、辛島稔子の「三元的成立論」などについて簡潔に述べている。

『伊勢物語』石田穰二訳注・角川ソフィア文庫

* 片桐洋一の成立論を整理すると同時に、その問題点を的確に指摘している。

『伊勢物語全評釈』竹岡正夫著・右文書院

『伊勢物語全読解』片桐洋一著・和泉書院

『新校注伊勢物語』片桐洋一・田中まき著・和泉書院

【参考文献】

『日本文学史』久保田淳編・おうふう
 『日本古典文学史辞典』京都書房
 『和歌文学辞典』有吉保編・おうふう
 『和歌大辞典』明治書院
 『日本古典文学大辞典』岩波書店